

特

集

商社と英語

座談会

コミュニケーション・ツールとしての英語



出席者
(敬称略)
(氏名五十音順)

岡井 大輔 (おかい だいすけ)

住金物産(株) 審査法務部海外審査法務課主事

オーリ・ゴパール (Gopal Ohri)

日商岩井(株) IT推進部e-ビジネスチーム

定森 幸生 (さだもり ゆきお)

(株)物産ヒューマンリソース 研修事業本部
ランゲージサービス部長

徐 義成 (Joseph Y. C. Zee)

(株)トーメン 生物産業部
アグロケミカル第2グループ

辻本 広伸 (つじもと ひろのぶ)

豊田通商(株) 車両第2部アフリカ車両グループ

松田 秀満 (まつだ ひでみつ)

日製産業(株) 情報システム営業本部
エンタープライズシステム部システム課長

司

会

松本 重敏 (まつもと しげとし)

(社)日本貿易会 国際・調査グループ担当部長

1 はじめに

松本 本日は、「コミュニケーション・ツールとしての英語」と題して、商社で海外駐在された方と、日本の商社で働いている外国人社員の方にお越しいただき、異文化社会における言葉とコミュニケーションの問題についてお話ししたいと思っています。まず、出席者のみなさんに自己紹介を兼ねてひと言ずつお願いします。



定森 幸生

定森 私は三井物産の人事部に長く勤め、現在は物産ヒューマンリソースの研修事業本部で国際研修や、英語を含むランゲージサービスのビジネスに携わっています。

今までのバックグラウンドのほとんどが人事畑で、海外では専ら海外事業所の現地スタッフの人事に関する仕事を手がけてきました。今や、国内でも好むと好まざるとにかかわらず英語を抜きにして人事を語ることができない時代になってきていることを日々痛感しています。



オーリ・ゴパール

オーリ 私はインド出身で1987年5月に大学を卒業後、3年間インド政府の鉄道省・警察部に働き、その後、日本語を勉強するためにネール大学に92年から95年まで在学しました。

95年に来日し、文部省の奨学金で1年弱日本語を勉強した後、新潟の国際大学でさらに2年経営学を勉強してMBAを取得、98年に日商岩井に入社しました。現在、IT推進部のe-ビジ

ネスチームでIT推進とeビジネス推進の仕事をしています。



松田 秀満

松田 当社は、日立製作所の直系商社で主にエレクトロニクス分野に特化した形で事業を推進しています。私自身は、情報システム製品の販売・営業の仕事に携わっており、ドイツのハイデルベルグの隣にあるマンハイムに5年半ほど駐在しました。現地でのビジネスの言葉はドイツ語ではなく英語でした。



辻本 広伸

辻本 当社は、トヨタグループの商社ということもあり、私自身は車両の輸出に携わっています。86年に入社し、89年から91年までケニアのナイロビに、95年から98年までベトナムのホーチミンに、98年3月から2000年4月までフィリピンのマニラに駐在しました。今日は、入社以来14年の会社生活のほぼ半分を海外駐在で過したという経験を踏まえてお話しできればと思います。



岡井 大輔

岡井 87年にイトマンに入社、89年のカナダ語学研修を経て90年から93年までニューヨークの金融子会社に駐在しました。その後、住金物産との合併があって帰国した後、再び97年から99年8月まで香港に駐在し、主に管理部門の統括をしていました。

徐 私は日本生まれの中国人ですが、16歳の時に米国に渡りカリフォルニアで高校を卒業後、カリフォルニア大学デービス校に入学して、農業科学と経営を専攻しました。大学卒業後しばらくはモンサントに勤めていたのですが、84年に帰国してトーメンに入社、以来アグロケミカルの仕事に携わっています。



徐 義成

2 英語によるコミュニケーションの難しさ

松本 まず、定森さんにお伺いしたいのですが、現地の人とのコミュニケーションで何か困ったことはあったでしょうか。

定森 苦労は2つありました。ひとつは個人的な苦労、いまひとつは仕事面の苦労です。個人的な苦労では、卒業するまで日本から一步も出たことがなかったので、初めて海外に赴任するにあたって自分なりにいろいろと勉強したつもりでしたが、やはり生まれながら英語で育ったネイティブと、そうでない者との差はあまりにも大きく、一生かかってもそのハンディは埋まらないんだなあと思感させられました。私の英語に対する取り組みはそうした認識を出発点として、どうやってそのハンディを埋めていけばいいのかということを考え続け、葛藤を繰り返してきたということではないでしょうか。

具体的なエピソードをひとつご紹介すると、入社してから2年ほど経った75年から77年の間、カナダのマギル大学でMBAの勉強をしたのですが、周りの人間がしゃべっていることがどうしても分かりません。そこで、どうしたかと言うと最初のうちは尋ねるのをためらっていたのですが、そのうち分からないこと

はいくら考えても分からないのだから言った人間や周りの者に聞くしかないと思ったわけです。

それをますます痛感させられたのは、翌78年にニューヨークで現地の人を相手に人事の仕事をしたときのことです。このときの経験は、20代から30代の一番鼻っ柱の強いころの自分してみると、大変な苦痛でした。というのは、人事の仕事は現地の人とのセンシティブな交渉事が多いのですが、若いながらも会社を代表して言いたくないこともいろいろと言わなくてはなりません。その時に、相手の言っていることが細かい点まで正確に理解できないから教えてくれと正直に切り出すのが最初のうちは相当抵抗感がありましたね。

でも、そここのところを乗り越えないと本当の意味でプロとして良識のある意思の疎通はできないと思います。

松本 ありがとうございました。英語の重要性はIT革命の時代になってますます高まっており、今やITの世界では英語が主流というか、ますますなくてはならない存在になってきているような気がします。



松本 重敏

定森 まさに英語が主流という感じですね。この流れは止められないのではないのでしょうか。ITの世界で日本語をde facto standardにしようと思えば、日本が今のインターネット技術にかわる技術を1年以内くらいに開発して、それを全世界に広める必要がありますが、それはなかなか難しいでしょうね。

松本 松田さん、ドイツ人にとっても日本人にとっても外国語である英語を使ってコミュニケーションするにはどういった難しさがあ

りましたか。

松田 その話に入る前に、私のバックグラウンドについて若干お話しさせていただきたいと思います。私は学生時代は英語が大嫌いで、自分でもなぜ商社に入ったのだろうというのが、入社当時の率直な感想でした。それが、すぐに英語が話せないと仕事にならないと気づかされたわけです。それで、くやしいから一生懸命勉強しました。語学というのは面白いもので、身につけてくるとどんどん話したくなる。海外のお客さんと話をしているとにかくしゃべり続けているといった感じでした。

その後、ドイツに赴任したわけですが、外国語である英語を使っているドイツ人が非常に慎重に言葉を選びながら自分の言わんとすることを伝えようとするわけです。それで、やはりコミュニケーションで一番大事なことは、ただ外国語が話せるということではなくて、相手が何を考えながら話しているのかをこちらもよく考えて話す必要があるということに気づかされました。

松本 お互いが外国語を介して話すことで、何か誤解が生じたことはありませんか。

松田 多少はありましたね。というのは、ドイツ語をそのまま英語に訳すと、ドイツ語的英語と言いますか、ちょうど日本語を英語に直訳したような感じになってしまうんですね。

ただ、そうした誤解も個人的に仲良くなって相手の個性や、それぞれの文化、価値観などが分かってくるとずいぶん違いましたね。

松本 辻本さんは、既にケニア、ベトナム、フィリピンと3ヵ国に勤務された経験がありますが、それぞれの国で感じられたコミュニケーションの難しさについてお話しいただけますか。

辻本 ケニアはもともと英国が宗主国ということで話し言葉としての英語は別にして、公文書などは非常に立派な英語で書かれています。ベトナムは私のいた頃のホーチミン市はまだ米国文化へのあこがれが強く、英語教育熱というか英語を学ぼうとする熱心さにはものすごいものがありました。

フィリピンはケニアと対照的で書く文章はいいかげんですが、英語を音として捉える感覚にはすばらしいものがあります。

そういうわけで、私にとっての一番の苦勞はどこへ行っても現地の人が英語の読み書きを上手にこなす中で、仕事をしなければならないということでした。

松本 そうした中で、何かお互いに誤解を生んだことはありませんでしたか。

辻本 幸いそういうことはありませんでしたね。仕事面では、誤解のないように交渉の内容を極力書いたもので残すというスタイルでやりました。

松本 岡井さんはいかがですか。

岡井 初めての海外経験は、カナダのブリティッシュコロンビア州に研修生として行った時のことです。赴任したのはハリソンホットスプリングスという人口わずか600人の小さな田舎町でしたが、そんな小さな田舎町でも移民の国というだけあってラオスから逃げてきた人や、ドイツや英国から移民してきた人などさまざまな人種の人が暮らしていました。

ところが、日本人でその町に住んでいたのは私だけで、彼らにとっては英語があまり話せない人がいること自体が珍しかったようです。私もそれなりの英語は勉強して行ったつもりでしたが、なかなか通じなくて大変苦勞しました。当時は、まだ独身でしたので食事は外でするわけですが、レストランがたった

一軒しかなく、しかも田舎なので食事をしていろいろと話しかけられたりします。ところが相手が何を言っているかわからないので、こちらはただにやにやしているだけで、何だか申し訳ないような気分になったものです。そういった時期が3ヵ月くらい続いたでしょうか。

松本 コミュニケーションがうまくいかないといったことはありませんでしたか。

岡井 カナダ時代はありませんでしたが、香港ではずいぶん困りました。私は、香港は英語圏だというイメージを持って赴任したんですが、実際行ってみるとそれほど英語が通じません。タクシーに乗って行き先を言って分かってもらえたのかと思っていると、とんでもない所に連れて行かれたりしました。

仕事の面では、私は管理部門の長をしていたのですが、スタッフの中にも英語が得意じゃない人がいて、こちらが英語で指示したことにイエスと答えるので理解しているかと思うと、後日気がついてみると、全然違うことをやっていたということがずいぶんありました。

3 外国人社員からみた日本人の英語力

松本 徐さん、長らく米国に暮らしていて日本に戻ってこられたわけですが、日本人の英語力についてどうお考えですか。

徐 同僚たちの英語のレベルはかなり高いと思います。私の所属しているのは輸出部門ですので、仕事で海外に出張したり、駐在したりする人が結構多いのですが、彼らの大半は非常に上手に英語を話すので仕事の面で困ったことはありません。

むしろ、私自身が長らく日本を離れていたせいでうまく日本語が思い浮かばないことが

あるので、そんなときは英語で話したりすることがあるくらいです。

松本 オーリさん、日本の商社マンの英語力についてどうお思いですか。

オーリ 残念ながら、話す方はあまり得意とは言えないですね。私が最初に勤務した部門では、海外に駐在して帰ってきた人が多く、ロシア語やスペイン語のスペシャリストとも言うべき人がたくさんいました。でも自信を持って英語が話せる人はあまりいませんでした。

また、プレゼンテーションをする際も日本語ではちゃんとメリハリをつけて相手に分かるように説明できるのに、英語でやると単なる説明に終わってしまうという感じがしました。

松本 商社マンの英語のレベルとメーカーなど他業界の方の英語レベルを比較すると、どうでしょうか。

徐 われわれはメーカーさんと行動を共にすることがありますが、メーカーさんの英語力も相当高くなっています。商社とほぼ同等と言っていいのではないのでしょうか。ただ、微妙なニュアンスが伝わっていないときにわれわれ商社マンが間違っていますよ、と教えてあげるとことはありますね。

オーリ 私の感じでは、話す方は別として商社マンの英語のレベルというのはメーカーの人より高いと思います。

辻本 徐さんのおっしゃった通り、メーカーの方の英語のレベルは高くなっていますが、会話の内容について商社マンに確認を求める場合も多くあり、ヘッジをするという意味では商社マンは役に立っていると思います。

松田 英語自体のレベルということでは、商社の人もメーカーの人も同じだと思います。ただ、コミュニケーションのスキルについては、商社の人の方が外国のお客さんと会っている頻度が多いので断然優位だと思います。

定森 私も、あまり変わらないと思います。もし違いがあるとしたら、入社されてから5年あるいは10年の間に海外勤務が多かったか少なかったかによって違いが出てくると思います。

それと、今まで英語を話す能力ということで話が進められてきましたが、英語ができるというのは何も話せる力のことだけとはかぎりません。もちろんface to faceというか、人と人との生きたビジネスというのも大事ではありますが、国際ビジネスの行きつくところは文書化能力だと思います。例えば、信頼関係を構築したパートナーでもトップ同士がある案件で合意した後には膨大なドキュメンテーション・ワークが待っており、そのドキュメンテーション・ワークには非常な英語力が必要とされるわけです。

文書化能力ということで、いまひとつ例をあげればeメールがあります。eメールのやりとりは1日数百通にも及ぶ場合があります。そうした時に、キーポイントは短くて簡潔な英語で、相手に用件を伝えるということです。パソコンの画面を何度もスクロールしないと読めない長大なメールは読むのに時間がかかりすぎて、場合によっては読んでもらえないリスクもあります。

4 パーフェクトな英語とは

松本 米国や英国のようにもともと母国語として英語を話す国、公用語として英語を使っている国などいろいろありますが、やはり話すにしても書くにしてもパーフェクトな英語が一番とお考えでしょうか。

例えば、外務省で経済協力に携わっておられる課長さんの話では、技術支援などでアジアへ出かけたりするとネイティブの人の英語は何を言っているかよく分からない。かえって日本人の話す英語の方が分かりやすいということ言われたそうです。そういう意味で、いわゆるクィーンズ・イングリッシュあるいはアメリカン・イングリッシュを話す方がいいのか、アセアン・イングリッシュというか、その土地にあった英語を話すのどちらがいいのでしょうか。

オーリ 私はパーフェクトな英語よりも伝えたいことが伝わるということが大事だと思います。

徐 私も同感ですね。東南アジアの人は、アメリカ的な英語を話しても理解できないと思います。やはり、ブローケンでも相手の話し方に合わせて話すことが大事だと思います。

松本 定森さんは、パーフェクトな英語ということについてどうお考えですか。

定森 翻訳の仕事をしている経験から感じていることをお話ししたいと思います。例えば、大蔵省や日銀が書いた日本語を翻訳しているネイティブの人がいます。彼らは、日本の金融界に10年、20年身を置いたベテランでいわば第一級のトランスレーターです。ところが、そんなプロフェッショナルが翻訳した文章でも別の人にもう一度練り直して書きなおさせると、少なくとも3分の1くらい赤字が入ります。それは、文法的にどうこうという次元ではなく、ここはこう書いた方が内容的に理解しやすいとか、この文は前後の日本語の原文と順序を入れ替えた方が英語としてパワフルになるといった次元のことです。つまり、こういう分野ではパーフェクトな英語とは何かといった議論よりビジネスの情報価値をどれ



だけ大切にコミュニケーションを図るかということがはるかに重要です。

一方、ブローケン・イングリッシュということに関して言えば、日本人はユニバーサル・イングリッシュのスピーカーとしてもっと自信を持って英語を話したり、書いたりすればいいと思います。ユニバーサル・イングリッシュとは、一言で言えばブローケン・イングリッシュです。世界を見渡すと英語を母国語としている人はほんのわずかで、アジアを含めて相当数の人がアメリカ英語でもイギリス英語でもないノン・ネイティブの英語を話しています。ノン・ネイティブの英語を話すわれわれがネイティブの人たちとコミュニケーションするには、彼らに合わせる努力をしなければならぬのはもちろんのことですが、ネイティブの人たちもノン・ネイティブの人が話していることを理解し、相手に分かりやすいような話し方を心がけるといことも大事になってきていると思います。

松田 私は商社マンが英語を話せるからと言って商売ができるフィールドはますます狭くなってきていると思います。先ほどからパーフェクトな英語とは何かが話題になっていますが、要はいかにスムーズにコミュニケーションができるかだと思います。例えばちゃんとした英語を話す人に対しては、やはりちゃんとした英語で話しかけるような努力をすることが必要なのではないのでしょうか。一方、

ノン・ネイティブの人たちに対しては相手が何を意図しているかを汲み取れるようなコミュニケーションに努めることが重要だと思います。

先ほどのオーリさんのプレゼンテーションのお話がいい例で、いくらパーフェクトな英語を話しても、自分の言いたいことを相手にうまく伝えられなかったら何にもなりません。そうしたコミュニケーションのできる英語がこれからの商社にとって必要なのではないのでしょうか。

辻本 タイとインドネシアの例で言うと、この2ヵ国は日本がアジアの中で最初に入り込んだ市場です。どちらも英語が母国語の国ではないので、英語はどちらかと言うとコミュニケーションのツールです。英語が母国語の国では、正しい英語を話すことが必要でしょう。ところが、東南アジアでもタイやインドネシアではパーフェクトな英語より、英語の中に現地の言葉を入れたりしたほうがかえってコミュニケーションがうまくいく場合があります。そういう意味で、やはり地域によって英語を使う目的というか意味合いはかなり違うのではないのでしょうか。

松本 岡井さんはいかがでしょう。

岡井 香港の例で言うと、やはり完璧な英語を話そうとすればするほど通じにくかったと

の印象を持っています。それでも、最初の3ヵ月くらいはできるだけすばらしい英語を使ってやろうと頑張りました。それがその後、どうもまずいということに気づいてからはできるだけ短いセンテンスで切って確認を取りながら話を進めるようになりました。ただ、ブローケンでは微妙なニュアンスが伝わりにくいところがあって、ちょっと苦労しましたね。

5 コミュニケーション・ツールとしての英語の重要性

松本 コミュニケーション・ツールとしての英語の重要性についてはみなさんどうお考えですか。

徐 やはり英語は重要なコミュニケーション・ツールだと思います。ヨーロッパの人にしろ、アジアの人にしろ、曲がりなりにもコミュニケーションができるのは、英語があればこそです。そういう意味で日本でも小さい頃から何らかの形で英語と接する環境作りをすれば日本人の英語力はもっと高くなるのではないのでしょうか。

松本 聞くところによると、eメールの普及により商社の本支店・現地法人間のやりとりは、むしろ日本語の方が幅を利かせているようですが、実情はいかがですか。

松田 当社の場合は、ひとつのルールがあって、当該国の言語もしくは駐在員事務所で定めている公用語でやりとりするというのが基本です。したがって英語を母国語あるいは公用語としている国では当然英語を使うことになります。個人ベースでは分かりませんが、ローカルスタッフにすぐ情報を伝えるという意味でも英語が一番なのではないのでしょうか。

オーリ 私の場合は、メールを含めふだんはすべて日本語で仕事をしています。3年前にe

メールのやりとりを全部英語でやろうとの動きがあったのですが、結局うまくいなくて今ではみんな日本語でやっています。ローカルスタッフでも日本語が分かる人は全部日本語でメールのやりとりをしていますし、そうじゃない人には現地の日本人が英語にわざわざ訳して伝えたりしています。

辻本 当社では、子会社と出先では日本語の方がどうしても早いので日本語でやりとりするケースが多いようです。出先の方はやはり英語でのやりとりということでしょうね。

定森 相手が誰かということだと思います。メールを入れる相手が日本人であればわざわざ英語でやる必要はないわけですし、むしろ日本語でやったほうがニュアンスが分かっているかもしれません。ただ、メールのコピーを落とす相手の中に1人でも英語しか分からない人がいて、かつその人の反応を期待するのであれば、やはり英語でやるべきなのではないでしょうか。

6 生活スキルとしての英語

松本 英語が氾濫すると日本文化が損なわれるのではないかと懸念を抱いている人がいるようですが、この点に関してはいかがですか。

定森 そういう懸念は間違っていると思います。英語にしる別の言語にしる、外国語が入ってくることによって日本の文化がそこなわれるというより、むしろ日本の文化をより客観的にみることができるようになるのではないのでしょうか。現状では、英語が氾濫しているというより日本人はまだ英語を勉強しないといけないというのが私の率直な感想です。

MBAを例にとるのが適当かどうかは分かり

ませんが、現在世界で毎年約10万人のMBAが輩出されています。その取得をめざして試験を受ける人が年間20万人ほどいますが、その中でアジアの人は3万人から4万人、うち日本人はわずかに3千人から4千人です。つまり大ざっぱに言ってアジアの中でMBAをこなせる程度の英語力を持った人が日本人の10倍程度いるわけです。この現状が10年後にどうなっているかを考えれば、国内で英語をやりすぎかどうかといった議論をやっている時間的余裕など全くないことは分かるはずです。

また、MBAということでもなくとも、アジアの20代の若者で英語をユニバーサル・イングリッシュとして使いこなしている人の数は、日本の商社で英語ができる人の10倍以上はいるのではないのでしょうか。例えば、当社では新入社員が入社して10ヵ月くらい経った翌年の1月、2月ごろに国際競争力をテーマにしたシンポジウムを社内研修として実施しています。その研修に招くゲスト講師は、有名な評論家や大学の教授ではなく、弁護士やエンジニアとして英語で仕事をしている20代のアジアの女性です。彼女たちの英語力は非常にハイレベルです。

こういう女性を目の当たりにすると、もう英語を勉強しなければいけないというより、彼女たちには負けたくないとの意識が非常に強くなり、研修担当の人間が英語の必要性を説かなくても効果てき面です。

松本 今の定森さんのお話を聞くと、われわれ日本人にとって英語はやるやらないより、できて当然という時代になってきているということなのでしょうね。

定森 そういうことだと思います。でもそうはいいながら現実にはそこまでいっていないということで、会社としては他社より早く、ローコストでエネルギーも少なく、仕事に使えるような英語力を身につけさせることが重要

な経営命題でもあるわけです。

松本 しかし、英語力などというのは、入社時に既に身につけていて当然のもので、会社に入ってから教育しないといけないというのはおかしいのではないのでしょうか。

オーリ 私は、日本の会社が日本での採用プールを日本人だけで考えているところに問題があると思います。日本語と英語の両方ができる人は日本人にかぎらずたくさんいます。にもかかわらず、ほとんどの日本の会社は日本の大学を卒業した日本人を採用しています。そうではなくて、日本で勉強して英語が話せ、いろいろな分野の知識を持っている人のプールから採用すれば、入ってから英語を教えないといけないといった問題は起こらないはずです。幸い、経営者のスタンスも少しずつ変わってきており、特殊技能を持った人を中途採用するといった動きも出ているようです。

定森 オーリさんのおっしゃる通りだと思います。もちろん、日本の会社ですから日本の大学を出た新卒の人を大事にしないといけないことはもちろんのことです。ただ、それとすべての基幹要員を日本人で固めるということとは別の次元の問題です。例えば、日本に留学されている外国人の中にも商社に適した人もいるはずで、そうした人もリクルーティングソースとして認識しないといけないと思います。

松田 ちょっと視点を変えて国内に目を向けてみましょう。私たちは国内にいるかぎりにおいては英語が分からなくても痛くも痒くもありません。今までそうやって暮らしてきた日本人もだんだんボーダーレスの世の中になって、休暇の使い方も上手になってきて海外旅行にも頻繁に行くようになりました。ところが、ドイツへ行っても、フランスへ行っても

も日本人だけで固まって土地の人と言もしゃべらずに帰ってくるというケースも見受けられます。そういう時にちょっとでも相手の言葉が話せたらそれだけ旅行も楽しくなるんだということが分かってくれば、日本人の英語や外国語に対する考え方も変わってくるのではないのでしょうか。

一方、少子化問題が叫ばれている日本ではどうやって将来の人材を確保していくかを真剣に考えていく必要があると思います。私がいたドイツの顧客事務所ではドイツ人のほか、スコットランド人、ギリシャ人が一緒に仕事をしていました。その時に感じたことは、いろいろな人種の人と仕事をしていると、いろいろな発想が出てくるし、仕事の幅も広がる。ひいては、人間関係の幅も広がってきてオン・ビジネス、オフ・ビジネス含めて本当に素敵な関係ができるということです。

松本 今までの話を伺っていると、日本人はどうも英語が苦手なようなのですが、英語は難しい言語なののでしょうか。

オーリ 私は日本語が一番難しい言語だと、インドにいるときは言われました。書く方にしても平仮名、カタカナ、漢字の3種類がありますからね。米国人に言わせると、日本語より中国のほうが難しいと言うかもしれません。でも、言語学の理論からすると、あらゆる言語の難易度は同じだと言いますよ。

松本 みな同じ難易度だとおっしゃいますが、よく外国人の方で日本にきて数ヵ月で日本語を話せるようになる人がいますね。

オーリ 日本の方でもインドへ来て数ヵ月でヒンディ語を上手に話している人はいます。私の例から言っても日本にきた当座は、テレビのニュースを聞いてもチンプンカンプンだったが、今はほぼ100%理解できます。日本人

も外国へ行って生活すれば英語がうまくなると思いますよ。外国語を身につけるにはモチベーションが一番重要だと思います。

定森 要は英語という言語をどう捉えるかということではないのでしょうか。私は、日本人が英語をハードスキル、つまり学問として研究したり、理屈をこねまわしながら身につける知識だと考えてきたところに問題の根源があると思います。

そうではなくて、英語をソフトスキル、つまり生活のためのスキルとして捉えれば英語という言葉に対する姿勢はずいぶん変わってくるのではないのでしょうか。もちろん、日常生活のレベルで英語を使えるということと、向こうへ行って3年以内に会社を立ち上げて収益があがるように持っていく場合に英語がなくてはならないんだという場合とでは要求される英語のレベルは違います。でも、その場合でも英語はやはり生活スキルだと思います。つまり、事業目標を達成するために必要な業務（社会生活）スキルとしての英語をどうやって身につけたらいいのかといったモチベーションがあれば仕事を通じて英語は確実に身につけていくと思います。

松本 今日は商社で海外に行かれて帰って来られた方と、商社で働いておられる外国人社員の方に、商社と英語の関わり合いについてお話ししていただきました。お話を聞いていますと、どうも日本人というのは英語を難しいものと意識しすぎて肩肘張っているところがあるようです。そうじゃなくて、生活のひとつのスキルとして英語を捉えるのであれば、ユニバーサル・イングリッシュのスピーカーとしての日本人の英語力もパワーアップするであろうし、仕事の上でもプライベートの上でも幅が広がっていくだろうといったお話であったかと思います。今日は、お忙しいところありがとうございました。

閉